

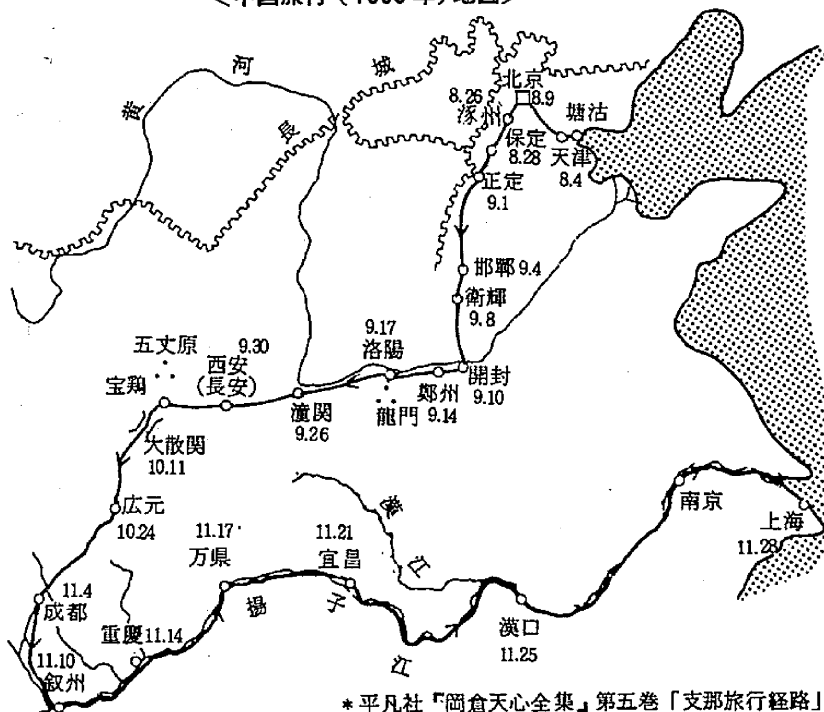
天心の中国認識

—「支那南北の区別」をめぐって

はじめに

岡倉天心（一八六二—一九一三）が日清戦争開始直前の一八九四年三月、「国華」第五四号に発表した「支那南北の区別」は、中国社会における南北地域論を展開した興味深い論稿である。「東洋の理想」（一九〇三）や「茶の本」（一九〇六）の華々しい評価の影に隠れてしまっただが、そこに示された鋭い中国認識は、天心を論ずる者の多くが注目するところである。またこの論稿が発表された年には、のちに内藤史学と称される独自の東洋史学をうち立てた内藤湖南（一八六六—一九三四）が「地勢臆説」を著わし、同様に中国地域論を唱えた。このことは天心の論稿が、単に美術論や文明論だけにとどまらず、日本の東洋史学・中国史学のなかで再評価すべきことを示唆している。日本の美術史において多大な貢献をした天心の業績を筆者の専門である中国史研究という狭い枠組のなかに押し込めてしまうことに若干躊躇しないわけでもないが、天心が中国社会の多様性・地域性を認識して中国を捉えようとした斬新な視点は、今日の我々中国史研究者が新しい地域史研究の方向を模索するうえで、改めて見直し継承・発展すべき卓見であるので、ここに拙論をまとめた次第である。

<中国旅行（1893年）地図>



鶴間和幸

* 平凡社『岡倉天心全集』第五巻「支那旅行経路」による。
地名に記した数字は到着の月日を示す（筆者記入）。

一、「支那南北の区別」に見える中国南北地域論

一八九〇年、満二十七歳にして東京美術学校教授兼校長の要職に就いた天心は「支那古代の美術」なる論文を著わし、漢魏六朝期までの中国古典美術史を概論するが、それはあくまでも書物から得た該博な知識を羅列したものにすぎず、読んでいて面白味がない。しかし一八九三年七月から一二月まで省内の命で初めて中国旅行に出かけたのちにまとめた「支那南北の区別」は、一四〇日間の旅行での体験をもとにしたものであり、その名文のなかに彼が感激した広大な中国大陸の情景が如実に現れている（地図参照）。当時東京美術学校生であり、のちに中国美術史の研究者として活躍した早崎稷吉（一八七四—一九五六）と、通訳の三輪高三郎、そして従僕として雇った中国人青年高二との三人だけを引き連れ、多くを馬車と船で具に見聞した貴重な体験は、これまでの書物上の知識を一新するものであり、彼の中国認識を確立するうえでの大きな契機となった。天心はのちにボストン美術館の美術品収集を目的に一九〇六年（北京—開封—西安—襄陽—漢口—上海）、一九〇八年（ベルリンからの帰途に東北・北京に寄る）、一九一二年（天津—北京—奉天）と三回中国を訪れているが、九三年の初めての旅行はとりわけ彼に大きな衝撃を与えたようだ。「元来今回ノ目的ハ漢唐古都ノ遺趾ヲ探リ且近代ノ戦乱ニ遭ハサリシ蜀中ノ風物ヲ観ント欲スルニアリ」と帰国後の講演で述べているように、本来の目的は主として中国古典美術の実見にあつたのだが、結果として予期しないほどの成果を得て帰ってきたのである。天心は帰国後、度々講演を行っている。翌九四年一月二四日の日本青年絵画協会月次研究会兼新年懇親会をかわきりに、二月二五日は大日本教育会（東邦協会と共催）、五月六日は国家経済会と続く。「支那南

北の区別」は四冊にもよる詳細な旅行日誌に基づいて、こうした講演を通してまとめていったものである。先にも述べたように当初美術雑誌の「国華」に掲載したが、その後陸羯南の創刊した新聞である「日本」三月二二・二四・二六日版に転載、続いて各分野の諸大家の論文を収めた雑誌である「日本大家論集」第六卷一二号の巻頭論説としても転載されており、その反響の大きさが想像される⁴⁾。

「支那南北の区別」自体は極めて洗練された文章で綴られているので、旅行日誌や講演メモと対照させながら、天心が中国旅行の経験を通して如何に南北地域論というものを確立させていったのかを追っていくことにしたい。またそれぞれの記述内容には重複する部分が多く、しかも微妙に表現を変えているので、各論点を表にまとめ比較対照しながら論を進めていくことにする（後掲の△天心の地域論対照表参照）。

天心自身の言によれば、中国旅行で得た成果は中国についての三つの新しい認識であった。それは第一に中国には通性がないこと、第二に中国は日本よりもヨーロッパに近いこと、第三に日本美術は中国美術から独立していること、である。当時としては、いずれも大胆な結論であるが、非常に含蓄のある鋭い発言でもある。一八八六年一〇月から一年間のヨーロッパ視察旅行と、今また一四〇日間の中国旅行と、ヨーロッパと中国とをまたにかけた実地見聞によってはじめて達した比較文化論とさえいう。とりわけ第一の認識は我々に強烈な印象を与える。「Is China one nation?」、「支那ニ通性なし」、「支那ハ単独ノ国ニ非ス」、「支那が無い」、「禹域曠漠、其間に一定の通性なき」、「一の支那を画き出し難い」等のことは、ともすると画一的な専制国家権力像をすぐに想定してしまう我々に対して、新しい視野を開いてくれる（表の「二、中国社会の特性」参

照)。勿論彼の見聞した中国がもうすでに往年の統一権力の勇姿をとどめておらず、ヨーロッパ列強の侵略の渦中であつたという事実を考慮に入れておく必要があるが、そうは言つても通性なきことがヨーロッパと同じとは、一体どういうことであろうか。ヨーロッパに匹敵するほどの広大な地域が、何故にヨーロッパと異なって統一権力を生み出したのか、その要因を明らかにすることが中国史研究の大きな課題であると承知していた我々にとって、専制権力を中国を理解する既定条件として設定するよりも、天心の言う如くまず一度統一権力を解体させ「地方の特質」に焦点を当てた方が、意味のあることかもしれない。

通性なき「地方の差別」については詳しく論じているが、そこでまず問題となることは、地域区分の方法である。結局は「支那南北の区別」という二地域区分に落ち着くものの、まずはヨーロッパと同様に中国も多民族社会であると捉えることによって六地域に区分する(表の「二地域区分」参照)。すなわち(一)河辺(北部、黄河沿岸)、(二)江辺(南部、揚子江沿岸)、(三)南辺(雲南・広東等、南海部)、(四)北辺(蒙古・満州)、(五)西藏(西域諸蕃)、(六)海辺(海浜)の諸地域である。しかしこれら中国を構成する六つの「差別」「異分子」のうち、「支那以外ノ分子」である南辺と北辺と西藏とは「支那の文化」に入らないので除き、また海辺も海上交通上の特別の地域である故に論外におき、残る河辺と江辺の二地域に焦点を当てる。「支那文化の中央を以て論ずれば、黄河と揚子江とを中心として、少なくとも南北二種の差異を見るべし」とし、中国社会を分析する有効な方法としての南北論を提起したのである。のちに見るよう中国史・東洋史の研究者の多くが安易に地理的、風土的な南北論を中国理解のための絶対条件とするのに対し、天心の南北論は所謂少数民族

の存在を分析方法上一応除外したうえで設定されたものであり、全くの漢民族中心史観でないことは注目してよい。おそらくヨーロッパに関する深い見識をもった者の眼で中国を眺め渡した結果であろう。

彼が実際に見聞してきた多様な中国社会のありさまが、この南北論に基づいて次々と明快に説明されていく。まず「黄河の辺は、曠野千里又千里、殆ど窮極なる所なきが如し。山に太行泰華あるも、以て平原の茫漠を破るに足らず。而して揚子江辺は、屠麟危峰、前に聳ふるに非ざれば、飛泉懸瀑、後に接す」と述べて南北の山川風土の差違を明らかにするが、これは北京・邯鄲・開封・鄭州・洛陽・西安へと華北を遊歴したのち、さらに秦嶺を南に越えて蜀地(四川)に入り、長江(揚子江)を下って上海に出るといふ、まさに南北の光景の隔差を目のあたりにしてはじめて発せられることばである(地図参照)。続いて生活形態・種族(漢族の容貌)・気習・言語等の南北の差違について指摘していく(表の三〜六参照)。

天心の南北論が単に地理的風土論に終らないことは、次の政治権力の歴史的展開を説明する箇所によく示されている(表の「マ政治」参照)。「中央集権の制の如きは、著しき変化なるべし」と断じ、一見すれば秦が天下を統一して以来不変に思われる中央集権的官僚制国家も、天心の南北論にかかると著しい変化として描かれる。夏殷周三代・春秋戦国の覇者はいずれも河辺にあり、呉楚の勢力といつても運動の中心たる中国に通ずるものではない。秦漢の統一後もやはり大勢は河辺にあり、三国六朝期になつて江河の両地域の交流が始まる。唐代は政治的な大勢は依然として河辺にあつたが、まさに南北両地域が混合した時代である。その後の五代の争乱以来中心は一層南下し、宋は江の精神の發揮した王

朝となる。しかし遼金元の北方異民族の王朝期になると、途中で明の回復の時期があるが江河兩地域の存在は影がうすいものとなってしまおうと云うのである。このような政治的中心の移動によって中国史の展開を捉える方向は、のちにふれる内藤湖南や桑原隲蔵の論文で紹介されている明清の学者にすでに見られるものである。だが天心は伝えられている通り当初は國家論の卒業論文を用意していたほどの人物である。その彼が「變動ニヨリテ國ハ動カス」「國家の觀念カ異なり人民ト政府トの關係ハ親密ナラス」と記して、絶え間ない王朝の交替と社会の不変性というヨーロッパ人のアジア社会認識、所謂停滞論に理解を示しながらも、なおかつ南北論によって「支那の發達」を論じようとする方向は、評価していかねばならない。ただし「發達」と言っても、"China is great when the 2 combines"の言葉の通り唐こそが南北二要素が合体した真の統一國家と考え、中国社会の継起的な發展の図式は描いていない。地域論的な方向からの一種の停滞論批判であり、興味深いものである。

以上のことは、文化現象上の南北差を述べたのち、中国美術史の展開を指摘した箇所でも再確認する(表「ハ美術」参照)。中国の美術文化には、周末の「河民の精」と宋朝の「江民の粹」と唐代の「江河合体の華」との三つのピークがあり、三代・六朝・五代はそこに至る氣力を内蔵し、漢・明はその余力を保っていた時代と考える。元・清に至っては、天心自身が中国旅行で失望した通り過去の余影にすぎないとまで言う。天心がこんなにまで南北地域論に固執するほど中国社会が統一を拒否する理由は何だろうか。天心は「唐以来、試拳の法は、言語を一定するに於て頗る効力あるべきも、万里山河の隔絶は、一千年の影響を以て打破すべからず」、「数千年來の一國民として、此の如き大区別あるは惟

しむべしと雖も、種族の混合せざるは、彼の祖先墳墓の地を重んじ、容易に他に移転せず、他郷に在って物故すれば、必ず其柩を郷里に送致する等のことありて、江河の相接する、極めて少なきのみならず、他郷の者と結婚すること稀なるが如きも、亦一原因たらずんばあらざるなり」(筆者傍点)と指摘する。「万里山河の隔絶」とは、まさに民衆の郷土主義によって形成されたものであり、自然的条件そのものを指すのではない。説得的な解答は用意されていないが、「支那南北の區別」全体の主旨から判断すれば、中国社会を構成する南北二地域の接触の機会が少なかった歴史状況こそが、地域性を色濃く残す理由なのであろう。

天心のこうした中国南北地域論が幅広く一般に紹介されたにもかかわらず、中国史・東洋史の研究者に直接継承されなかったことは誠に残念である。そもそも東洋史学なる学問は、天心が旅行中の天津で巡り会った留学中の那珂通世(一八五一—一九〇八)の提議によって、翌九四年に中等教育の科目として採用され、その後一九〇七年に京都帝国大学文科大學史学科に東洋史学科が設立されるという経過をもつ。当時の中国史研究は那珂の「支那通史」(一八八八—一九〇)に代表されるように王朝交替史観の域を出るものではなく、学問としても伝統的な漢学・支那学の系譜を受けるものであった。そうした時代性を考えると天心の中国認識は一層際立ってくるが、逆に言えば学問としては受け入れ難いものであったようだ。そしてさらにそのことを決定づけたのは、のちにふれる桑原隲蔵の学究的論文「歴史上より観たる南北支那」が一九二五年に公表され、この論文が現在に至るまでの中国南北論の嚆矢として多大な評価を受けてきたことである。時代を先取りした天心の中国史観が、漢学からの脱皮

を目ざし学問的な独立をはかりつつあった東洋史学にも受け入れられなかったのも、当然といえば当然であろう。

しかし今日の我々にとって天心の中国認識は改めて学ぶべきものであることを強調したい。内容の評価は述べてきた通りであるが、もう一つ彼の思想を生み出した時代的背景について若干ふれておく。

天心が「支那南北の区別」を発表した年の七月に日清戦争が起る。この事件は日本の近代史にとって大きな転機となった。ヨーロッパ文明を積極的に導入し新たに「文明国」の仲間入りを果たしたアジアの日本が、日清戦争の勝利を機に欧米帝国主義諸国と肩を並べて大陸侵略へと狂奔する。それはまた思想的にも重要な転換期であった。戦争勝利による自信が従来の欧化政策を反省させ、日本固有の文化、日本民族の優秀性を再評価しようとする国粹主義的傾向が顕著になってくるのである。天心のアジア主義がこの方向で主導的役割を演じたことは否定できないが、安易にのちの大東亜主義的思想と結びつけてしまうことは戒めなければならない。確かに陸羯南らの組織した国家経済会における講演では、現実の中国の姿に失望したことを漏し、「日本力東洋ノ唯一ノ代表者タルコト」を主張した一面も見える。しかし「広漠なる版図」と「遼遠なる時代」を抱える中国の特質を必死に捉えようとする真摯な態度には、遅れた中国を侮蔑するような感覚は見えない。

二 天心以後の南北地域論

「支那南北の区別」が発表された一八九四年の十一月一日・二日の大阪朝日新聞に、内藤湖南が「地勢臆説」なる論文を著わしたことは、偶然にしても興味をそそる。当時の湖南は大阪朝日新聞社客員であったが、のち

の一九〇七年に京都帝国大学の東洋史学科に迎えられ、やがて内藤史学として独自の学風を樹立する。そうした彼が天心と同時期に中国地域論を展開したのである。湖南の地域論は文化移動論とも言うべきもので、天心の南北論とも共通点が見出せる。彼は清の趙翼の地氣移動説を援用して文化移動論を立てる。中国人にとって地氣とは万物を養い人間生活の行方を左右する大地の靈気である。その地氣を包含した地脈を求めて墓地・家屋・都城を築造することが、家や国家の繁栄をもたらすと考えられている。趙翼は唐の開元・天宝年間（七一三―七五六）に西北から東北に地氣が移動しはじめたことに、西北の長安に都をおいた王朝（周・秦・前漢―唐）から東北の燕京（北京）に都をおいた王朝（遼・金・元・明・清）への交替の正当性を求めた。湖南はこうした趙翼の地氣移動論を政治・文化両側面から捉え直す。すなわち政治的中心の變遷を決定づける地氣の移動は洛陽（堯・舜・禹・殷・周）↓長安（西周―唐）↓燕京（遼・金・元・明・清）と跡づけられるが、一方東晉・南朝が江南に遷都したのちに依然としてその地域が文化的中心になり続けたので、まさに中国の勢力は政治的中心と文化的中心の二つに分裂してしまつたというのである。運命論的な地理観にとどまらず、政治・文化の両側面から中国社会の展開を捉えようとした見方は注目してよいであろう。だが天心の地域論と比較すると、湖南の論は実際に中国の地域的多样性を感じてつかんでいないこともあって、まだ机上の学問の感が強い。湖南はその後一八九九年に初めて中国に足を踏み入れ、旅行記「燕山楚水」を著わすが、やはり独自の中国文化史学が成熟するまでにはしばらく待たなければならぬ。

繰り返すようであるが、一八九四年日清戦争の年に相前後して二つの

中国地域論が提起されたことは象徴的でもある。当時東京美術学校長の天心と朝日新聞社客員であった湖南との間に直接的な交友関係は見出し難いが、一人の人物を介して近い立場にいたことは認められる。前内閣官房長官で国粹主義の領袖的存在であった高橋健三（一八五五—一八九八）は、天心とともに美術雑誌「国華」を創刊し日本美術の振興に尽力するが、一方で湖南を朝日新聞社に迎え入れて湖南にとっては恩人ともなった人物である。勿論高橋を介するまでもなく二人の思想的傾向は近かったので、お互いその言動には注意していたものと想像される。そうした二人が同時期に地域論を唱え、新しい方向から中国認識を深めようとした理由は、やはりかつての文明大国中国が近年來欧米列強に侵略され分裂しつつある現実を目の当たりにしたときの衝撃にあるだろう。中国に対する同情心はあっても、のちの時代の論者の如く蔑視の態度は見られないだけに、当時としては冷静な観点をもった中国認識として注目されよう。

天心の南北論が湖南の文化移動論とともに、日本の中国史観にとって地域論を導入した画期的なものであったわけだが、それがその後どのようになされたのかを見ていくことは、天心論文の評価のうえで欠かせない作業であろう。

天心に始まる中国南北論は現実の中国を認識する一方法論でもあるので、日本と中国との関わり方の変化に対応して展開していったと言える。また天心の主張とは別にしてやがて東洋史学・中国史学なる学問のなかにも南北論が取り入れられたので、その学問のあり方とも深く結びついていった。それ故に天心以後の南北論をただ無秩序に列挙するよりは、時代的特徴を明らかにしながら整理していった方が意味のあることである。

南北論の研究史を大きく三つの時期に分けたいが、それは日本の近現代史にとっても重要な分期である。第一は天心・湖南論文の発表された日清戦争の年一八九四年以降、日本が本格的に侵略戦争を開始する滿州事変が起きた一九三一年までの時期である。日本が朝鮮・滿州を植民地として経営していく歴史のなかで、朝鮮史・滿州史に焦点を当てた東洋史学が学問として形成されていく。¹²日清戦争を契機とする国粹主義的風潮の昂揚とともに日本人の対中国観には侮蔑意識が表に出てくるが、華北以南の中国本土には直接侵略していないだけに、中国史研究は比較的冷静な態度で進められた。したがって南北論も日本の政治的立場よりはむしろ中国の国内状況の認識と関わって展開される。一九一一年、鉄道国有化計画に反対した四川暴動をきっかけに武昌で武装蜂起が成功し、一六の省が独立を宣言する。翌年一月中華民国の成立が宣言され、二月には宣統帝が退位し、秦朝以來永らく続いた専制王朝はこの辛亥革命によって清を最後に幕を閉じる。しかし一三年、革命派に対する袁世凱らの巻き返しによって、以後軍閥の武力抗争の時代に入り、中国は一九世紀半ば以来の列強の侵略に加えてますます分裂状態に陥っていく。この時期の日本人の中国認識には、まさにこうした中国の分裂状況を反映して地域性の問題が取り上げられていく。

天心の南北地域論を直接継承したものは確め難いが、まず地理学者志賀重昂（一八六三—一九二七）の「山水叢書・河及湖沢」（一九〇二）と「外国地理参考書」（一九〇二）を挙げたい。彼は、風土的・歴史的差異の著しい黄河水系と揚子江水系が中国の南北の地域をそれぞれ代表しているのので、唐の如く兩地域をうまく調和させる力のある者が中国全体を統一すると述べる。そして清国も江河兩系を一体化できず、将来は

黄河系がロシアに、揚子江系がイギリスに掌握されるという危惧を抱く。志賀は天心の南北論にふれてはいないが、論旨から見ても、また欧化主義に反対し国粹主義的立場にあったことからしても、天心の影響があったものと思われる。おそらく国家経済会での講演か、新聞「日本」を通して天心の南北論を知っていたであろう。因に一八九八年の日本美術院開設の披露式にも志賀は招待されている。

この時期の南北論のなかで、現在に至るまでの学問的影響力を考えるならば筆頭に挙げなくてはならないのが、桑原隲蔵（一八七〇—一九三一）の三部作「晋室の南渡と南方の開発」（『芸文』五一—一〇、一九一四）、「歴史上より観たる南北支那」（『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』一九二五）、「歴史上より観たる南方の開発」（『東洋史説苑』一九二七）である。とくに「歴史上より観たる南北支那」は、南北論の嚆矢として今日に至るまで度々引用される。桑原は明の章潢が『圖書編』に著わした天下の形勝論を引用しながら、南北論をまとめていく。地勢・地味・氣候・物産・風俗・人情百般にわたる南北支那の顕著な差違は、歴史的に捉えるべきことをまず強調する。そして「北支那に於ける野蛮なる夷狄の侵入」と「南支那に於ける優秀なる漢族の移住」こそが、南北盛衰つまり魏晉以前は「北支那」にあった文化の中枢が晋の南渡をきっかけに南に移動し、南宋以後は「南支那」が中枢となる一の原因であるとする。人材・戸口・物力などの南北比較を試みる際の該博さは、とうてい天心の論文の及ぶところではない。なお桑原の場合にも、朝鮮・満州に近い「北支那」よりも歴史的に重要性を増してきた「南支那」に注意を払うべきとの発言が見える。そのほか幾つかの論稿があるが、何れも桑原を超えるものではない。¹⁴⁾

第二の南北地域論は、満州事変以降一九四五年の敗戦に至る一五年間の日中戦争期におけるものである。とくに三七年以降は中国との全面的戦争が開始され、華北から華中・華南に至るまで中国全土に戦線が拡大すると、中国の地域の問題が日本の中国支配という直接的な利害関係のもとで盛んに議論されるようになった。天心のアジア主義も偏狭な大東亜共栄圏思想によって歪められ、アジアの指導者として近代化・文明化に成功した日本と、それに失敗し列強の餌食となった中国との隔差を風土論として説明し、日本の中国支配の正当性が主張された。

和辻哲郎（一八八九—一九六〇）は「風土—人間学的考察」（一九三五）で「シナ」の風土を代表するものとして黄河と揚子江とを挙げる。¹⁵⁾ 沙漠から出てモンスーン地帯に入る黄河の風土は意志の緊張と戦闘性という沙漠的性格を作り出すが、茫々たる平野を単調に流れる揚子江は受容的・忍従的なモンスーンの性格を形成する。この対比的な風土も「シナ」社会全体から見ると、黄河文化圏の芸術が消失してしまった宋元以後からは、モンスーン的性格の特殊形態として捉えられるというのである。和辻にあっては、黄河的風土が作り出した先秦より唐宋に至る「シナ」文化の粋はすでに過去のものであって、「シナ」社会の無政府性、「シナ」人の無感動性ばかりが強調される。他の論者も一様に風土の人間社会に対する規制力を重視する。藤田元春「支那の文化とその風土」（『アジア問題講座』第一〇巻、一九三九）も地気・水土という自然環境からくる支那南北の別が人文現象をも支配すると述べ、鳥山喜一「黄河文化と揚子江文化」（同上）も、黄河と揚子江の両大河流域の自然的条件が黄河文化とその一変形たる揚子江文化とを創造・発展させたと言う。別枝篤彦「支那文化に現れたる南北の性格」（『地理教育』三二—六、

一九四〇）も同様な立場から古代神話・説話などに見える南北の風土の差を明らかにする。当然のことながら風土の影響を全く否定することはできないし、風土という概念自体が自然的環境だけを意味するのではないという意見にも耳を傾けなければならない。しかし風土的説明による中国南北論が中国社会の主体的発展の側面を無視し、停滞性・無気力性を強調してしまうことに、疑問を感じざるをえない。しかもその背後には、中国の国家権力の無能性を指摘して日本の侵略を正当化する政治的論理が色濃く見出されるのである。藤田は日本人の使命は北から南に下った支那文化を東海に確立することだと言ひ、烏山も揚子江流域の近代化は外国資本の下に着々と強化されたと述べる。星斌夫「中支開発の史的概観」（『歴史公論』七一三、一九三八）も桑原論文に依拠すると言ひながら、欧米文化を消化した日本の指導下に、まさに占領したばかりの「中支」の経営が行われるべきことを提言する。天心やその後の桑原に見えた南北論が、多様な性格をもつ中国社会を積極的に理解する有効な方法であったにもかかわらず、日本が中国を分割・統治する正当性の論拠にまで歪められてしまったのである。

こうしたなかでも加藤繁（一八八〇—一九四六）の「経済上より見たる北支那と南支那」⁽¹⁶⁾（『社会経済史学』二二—二二・二二合併、一九四三）と岡崎文夫の「魏晋南北朝通史」（弘文堂書房、一九三二）は注目してもよい。中国経済史の分野で数多くの先駆的業績を残した加藤の、日本は混乱した「支那」経済を復興すべきだという議論には首肯し難いとしても、緻密な経済史分析の成果によって南北中国の歴史的構造を解明した点は評価されよう。彼は「南支那」の植民・開発が進むにつれて経済的中心も「北支那」から「南支那」に移行し、やがて後者が前者を

凌駕していく過程を農業・手工業の側面から分析した。とくに三国以後「南支那」の稲の生産が発達し、唐末期には品種改良が行われて早害に強い占城米^{チンキョウ}の栽培が普及し、さらに明清期になると二毛作が進められるという農業生産力の発展過程を明らかにした点は、戦後の社会経済史研究にも継承されるものであった。従来の政治・文化の中心が移動していくという議論に、経済史の分野から有力な裏づけをしたのである。⁽¹⁷⁾一方の岡崎論文は、やはり桑原論文を継承し、魏晋南北朝の政治史研究の立場からそれを発展させたものである。南北論は個別的時代史の側からも深化させていく必要があることを示唆している。

第三は戦後の中国史研究における南北地域論である。戦後の中国史研究は停滞論批判を掲げて中国社会の主体的な歴史的発展過程を解明していくことを主要な課題としてきた。⁽¹⁸⁾その成果は、ここでいちいち挙げるまでもなく我々のすでに消化するところであるが、南北論の研究史として見るならば、問題点の残されていることに気づく。つまり南北論を発展段階論のなかに当然の如く肯定的に取りこんできたにもかかわらず、その南北論自体の議論を放棄し、曖昧なままに旧来の説を認めてきているのである。⁽¹⁹⁾中国社会の発展の一面期を唐末五代の時代に認めると、古代から中世への移行は、華北の小農経営を主体とする粟作地域から江南の地主・佃戸経営を主体とする稲作地域への経済的中心の移動として把握され、⁽²⁰⁾まさに地域の移動を伴った社会変革の姿が示される。地域の移動が社会発展の重要な契機となっているにもかかわらず、その理由については明快な説明はない。何の疑いもなく南北論が社会発展論のなかに組み込まれてしまったからである。南北論は社会の発展を説明する理論であっても、一方でかつてのように停滞性を説明する理論にもなりうる

非常に曖昧なものなのである。我々としては、天心以後の南北論が日本の近代史の展開とともに様々に解釈されてきたことの意味を看過すべきではない。

おわりに

以上見てきたように、天心の南北地域論が中国社会の多元性・多様性を理解するうえで有力な方法であったことは、彼以後の南北論の展開からも承知できたものと思う。しかし現在の我々が無批判に継承するわけにはいかないことも事実である。そのことは筆者自身の今後の検討課題であり、天心の「支那南北の区別」の評価を意図した本稿の目的から離れてしまうことになるが、若干ふれて結びに代えたい。

天心が「支那文化の中央を以て之を論ずれば」と前提条件をつけて南北地域論を展開したように、南北論には漢民族中心史観の危険性のあることに留意しなければならない。天心は周辺の少数民族をも取りこんだ地域区分を試みており、その場合の中国社会の地域論は如何なるものになったのか非常に興味深い。しかし彼でさえも、そこまで達しえなかったところに中国社会の捉え難き多元的性格が認められるのである。日本の東洋史学が主な研究の対象としてきたのは、一つに漢民族を中心とする所謂中華帝国の江南開拓史であり、もう一つに漢民族と北方遊牧民族との対立抗争史であった。南北論は前者の方向にとって有効でも、後者の歴史を説明する理論ではない。天心も十分承知のことであるが、多民族を包みこんで形成される中国社会の複雑な構造を把握するには、南北論では不十分なのである。

中国社会の歴史的展開を捉える場合、国家・民族の概念を如何に設定

していくかが重要な問題点となる。我々は中国に形成される国家が漢民族―それ自身が絶えず拡大することを志向してきた歴史的概念であるが―を支配民族とする多民族国家であることをまず認めたいうえで、社会の歴史的展開を明らかにしていかなければならない。その場合、国家史の枠にとどまらず民族の視点をも取りこんだ地域概念を設定する必要がある。もはや南北の地域区分では通用しないのである。戦後の中国史研究は、停滞社会論の克服をめざして社会の歴史的発展過程を追究してきた。そこに一定の成果はあったが、より多元的な中国社会を捉えていくにはまだまだ多くの課題が残されている。社会の発展は、一方でその裏がえしとして絶えず後進地域を作り出す過程であったことを十分認識し、民族・国家の概念をも包みこんだ地域史研究の方向を模索していかなければならないのである。

註

- (1) 岡倉一雄「父岡倉天心」(聖文閣 一九三九、中央公論社「一九七二」、早崎稜吉「岡倉天心の支那旅行に就いて」(『美校校友会誌』一九、一九四〇)、清見陸郎「天心岡倉覚三」(筑摩書房 一九五〇、中央公論美術出版 一九八〇)、宮川寅雄「岡倉天心」(東京大学出版会 一九五六)、斎藤隆三「岡倉天心」(吉川弘文館 一九六〇)、竹内好「岡倉天心―アジア観に立つ文明批判」(『朝日ジャーナル』一九六二・五・二七、のち『日本の思想家―朝日新聞社 一九六二はかに所収)、色川大吉「東洋の告知者天心―その生涯のドラマ」(日本の名著「岡倉天心」 中央公論社 一九七〇)、橋川文三「福沢論吉と岡倉天心」(『朝日ジャーナル』一九七二・二〇・二〇、のち『近代日本と中国・上』朝日新聞社 一九七四

所収)、大岡信「岡倉天心」(朝日新聞社 一九七五)、梅原猛編集・解説
近代日本思想大系「岡倉天心集」(筑摩書房 一九七六)、福永光司「岡
倉天心と道教」(「岡倉天心全集」平凡社 一九八一、のち著書「道教と
日本文化」人文書院 一九八二所収)、松本清張「岡倉天心とその「敵」
IVライバルものがたり」(「芸術新潮」一九八二一三)。いずれも天心が
多様性をもつ中国文化の特質を黄河と揚子江流域の南北二地域に区分して
明らかにしたことは、明治期という時代を考へても優れた創見であると高
く評価する。しかしそれらは天心論の一部として一般的な評価を加えたも
ので、内容にまで深く立ち入ったものはない。一方中国史研究の立場から
ふれたものは全くない。

(2) 拙稿「中国古代史研究における新しい課題―地域論的方法の有効性―」(茨
城大学人文学部史学専攻会「史学通信」第六号 一九八二)。

(3) 「支那美術ニ就テ」。

(4) 全集本では以下のものに収録されている。

岡倉一雄編、六芸社版「岡倉天心全集」第一巻(一九三九)、平凡社版

「岡倉天心全集」第三巻(一九七九)、明治文学全集「岡倉天心集」(筑
摩書房 一九六八)。

(5) 「支那の美術」。

(6) 「國家經濟会に於ける講演メモ」(平凡社版全集第五巻所収)。

(7) 「旅行日誌」一八九四・八・五「那珂氏(数年来内地ニ旅行セラレタル人)
玉置氏亦来ル……那珂氏来りて旅中用品ヲ教ヘラレ前途に注意アリ 同國
の好意喜ぶへし」。

(8) 松本三之介「國民的使命觀の歴史的變遷」ニアジアは一つ―岡倉天心につ
いて(「近代日本思想史講座」八、筑摩書房 一九六一)。

(9) 竹内好前掲論文。竹内は戦争中天心の「アジアは一つ」という思想が安易
にアジア解放のための「聖戦」の名目のもとで利用されたが、その言葉の
真の意味は、多様な文化をもつアジアが武力をこえた愛・宗教において一
つでなければならぬと解すべきであり、事実としてアジアは一つを意味す
るのではないと指摘する。

(10) 「内藤湖南全集」第一巻(筑摩書房 一九七〇)所収。

(11) 宮崎市定「大地は生きている―中国人の地理思想―」(「歴史地理学の諸
問題」柳原書店 一九五二所収)。

(12) 以上「桑原隲蔵全集」第一巻・第二巻(岩波書店 一九六八)。

(13) 星城夫・北山康夫・岡崎文夫・守屋美都雄・宇都宮清吉・三田村泰助等の
後掲論文。

(14) 岡田正之「支那古代に於ける南北思想説に就きて」(「経史説林」一九

〇七)、山路愛山「南北支那の性情の差違」(「支那論」民友社 一九一

六)、中村久四郎「南支・北支の歴史及び地理的考察」(「中央史壇」七

一五・六、一九二三)、同「東洋史教授資料」(三省堂 一九二七)、速

水一孔「歴史より観たる支那の南北」(「支那」一八一九・一九二七)、

浅野利三郎「歴史地理的に見た支那の南北」(「歴史地理」五二―三・一
九二八)。速水が「今日民国創設以後茲に十五年来争乱相続く中にも大体

に於て南北と云ふ分形がボンヤリながら現はれ居り、最近別けて此の区別
が著しき様見受けらる」と述べるなかに、この時期の南北論の時代的特徴
が窺える。

(15) 第三章モンスーン的風土の特殊形態、一シナ。この部分は一九二九年に初
稿、その後一九四三年の新版で改稿されている。

(16) 加藤著「支那学雑草」(生活社 一九四四)に所収。

(17) 北山康夫「歴史上より見たる南北支那」(支那歴史地理叢書「北支那の競争地理」富山房 一九三九)も桑原論文に拠りながら、政治・軍事の中心である「北支那」と経済の中心である「南支那」を結びつける大運河の漕運の役割に注目する。

(18) 歴史学研究会編「國家権力の諸段階―歴史学研究会一九五〇年度大会報告」(岩波書店 一九五〇)、鈴木俊・西嶋定生編「中国史の時代区分」(東京大学出版会 一九五七)。

(19) 南北論はとくに魏晉南北朝史研究のなかで定着してきた。守屋美都雄「南人と北人」(『東亞論叢』六 一九四八)、宇都宮清吉「南朝と北朝」(『世界歴史シリーズ―大唐の繁栄』世界文化社 一九六六、のち著書「中国古代中世史研究」創文社 一九七七所収)参照。ほかに三田村泰助「北と南の文化論」(『生活の世界史 黄土を拓いた人びと』河出書房 一九七六)は桑原論文に依拠したもので、とくに新しい議論は見えない。陳舜臣・増井経夫「揚子江」(中央公論社 一九八二)は黄河文明に比して軽視されがちな揚子江文化に焦点を当てた南北の比較文化論。

(20) 西嶋定生「中国農業史の問題点」(『中国経済史研究』東京大学出版会 一九六六所収)は、中国農業史における華北陸田農業と江淮水田農業の二大農業地区の地位の推移を生産力の発展から説明すべきであるが、単に後者のみで生産力の上昇が行われたのではなく、前者もその間に内部において生産力を高めていたのであるから、両者の相対的な関係に注目すべきであると重要な指摘をしている。

△天心の地域論対照表△

二 地 域 区 分	一 中国社会の特性
<p>支那南北ノ外好名詞ヲ求ムレハ</p> <p>①河民 黄河沿岸 ②江民 揚江沿岸 ③南辺 広東当 ④北辺 燕趙</p> <p>Which is the real line of distinction between N and S?</p>	<p>I 旅行日誌 (一九二一年)</p> <p>Is China one nation? China at Europe</p>
<p>支那人ノ區別</p> <p>①江辺 (江一) ②河辺 四川 湖南北 安 (徽・江西・江蘇)</p> <p>③雲南 ④蒙古 ⑤西藏 ⑥海辺 広東</p>	<p>II 支那旅行講演メモ (六卷・上巻および二・三講演)</p> <p>支那ニ通性なし 地方の差ヲ思ハサルヘカラス 年代ノ差別モアリ 地方ノ差別モアリ 年代ヨリ地方ヲ憶ハサルヘカラス</p> <p>一定ノ性なし 人民ノ性質カ今日ニ於テ大ニ異リ居ルハ自然ナリ 欧州ニ□人種アルカ如ク 欧に通性なきカ如ク 支那ニ通性なし</p>
<p>支那美術ノ發達ヲ論スルニ於テハ支那ニ於ケル異分子ヲ察知スルノ必要アルコト是レナリ</p> <p>……今同國ニ於ケル異分子ヲ枚擧スレハ其細ナルモノノ少ナカラサルヘシト雖モ地方ニ就テ之ヲ區別スレハ④蒙古⑤西藏及③南海部ヲ除キ中國ニテ少ナクモ②南部①北部及⑥海浜ノ三種ニ屬スヘシ……</p> <p>支那以外ノ分子ヲ含ミ論スレハ支葉ニ涉ラサルヲ得サルヲ以テ今日ハ仮リニ南部北部ノ區別ニ就テ鄙見ヲ陳ヘン余試ニ河辺江辺ノ字ヲ以テ之ヲ分タントス</p>	<p>III 支那美術ニ就テ (講演筆記録)</p> <p>支那ハ単獨ノ國ニ非スシテ一種ノ歐羅巴ナリ 欧州ノ幾種ノ人種ヨリ成立チタル如ク支那モ亦幾種ノ人種ヨリ成立チタルナラン 地方ノ特質アルカ為メニ欧州全体ヲ包含スル通性ナキカ如ク支那ノ通性亦捉ラヘ難カルヘシ</p>
<p>支那の國の大体から云つたならば、其中に於ける地方の差別と云うものも余程余計でなければならぬ。それを只だ一の南とか北とか云うだけのもので差別するのは不足でありませう。今大きく分つても五つや六つの區別は生ずるのであらう。此所では極く④北部の蒙古、滿州などと云ふものは支那の直接の文化に參しませんが、之を除き、それから③雲南、印度、緬甸などの極く南部で支那人も蛮子と稱する位の南の野蠻で、北の文明上から云へば、一あまりすから此方上から、又⑥西の方の西藏なども除いて、全く支那の文化の中心であつた中央支那ばかりに付きて論じましたも中々多くの差別があるだらうと思ひます。……中央に於ける差別を二つに分ては、①黄河の縁に起つた文明と②揚子江の縁に生じて發達した文明との差違があるだらうと存じます。</p>	<p>IV 支那の美術 (一九二一年 講演筆記録)</p> <p>第一支那に付て感じましたのは支那の無いと云うことであります。支那が無いと云うと可笑しいやうでありますが、言を換へて申しますれば支那と云う通性は捉らへ難いと云うことでござります。歐羅巴には通性なきが如く、支那にも通性がないかと存じます。……支那のことに付て申しましては我々は是れは唐、是れは漢だ、是れは元明だなどと時代の差違を申しますが、尚ほ深く支那の性質を探りましたならば此外に地方の差別から生ずる性質がありまして、一定に支那は何んだと云つた時にそれを認めることは誠に難いだらうと存じます</p>
<p>此の如く面目を異にするものは何ぞや。……退いて之を考ふるに、支那の地勢、元と南北の別ありて、自づから其特性を現出せるを以てに非ざるなきか。</p> <p>今仮りに⑤前後蔵等の西域諸蕃を除き、北は④靺鞨と稱する蒙古滿州を去り、南は③印度南洋の影響を承けたる雲南廣東等の諸省を省ずれば①黄河と②揚子江とを中心として、少なくとも南北二種の差違を見るべし。</p> <p>今試みに南北の中心たる、黄河と揚子江との氣勢相異なる所を挙げ、識者の教を請はんと欲するなり。</p>	<p>V 支那南北の區別 (一九二一年)</p> <p>夫れ欧州に通性なし。……禹城曠漢、其間に一定の通性なきも、亦之に外ならず。</p>

I 旅行日誌	II 支那旅行講演メモ	III 支那美術ニ就テ	IV 支那の美術	V 支那南北の区別
<p>Difference of climate and soil</p>	<p>山川 (北) (南) 荒原 山脈 水泛 水多し 寒 暖 木材なく 木アリ</p>			<p>• 黄河の辺は、曠野千里又千里、殆ど窮極なる所なきが如し。……</p>
<p>I 旅行日誌</p>	<p>生活 泥屋 木竹 車 舟 不潔 清潔 力耕 豊饒 質樸 奢侈</p>	<p>• 人種 (一) 古来雜種ナルコト (二) 黄 白 肥 瘦 大 小 眼 黄、</p>	<p>• 尚ほ又人種の上から云ひましても 余程差があるだらうと思ひます。 ……</p>	<p>• 支那国民の一種族に非ざるは、固より予が言を持たずと雖も、河江両辺人民の容貌体格、実に著しき差あるに似たり。……</p>
<p>• Difference of race? • Growth of these two branches of Chinese Race • Is there not 3 Chinese race 1. 黄河以北 (Tartar) 2. 黄河大江の間 △ pure Chinese Race 3. 大江以南 (Indian) • difference of language</p>	<p>• 政治 ① 禹 貢九州 ハ北辺 ② 周 時 楚ニ分管なし 呉ハ寿夢以前ニ中国ニ通セス ③ 秦 末タ呉ヲ亡サス ④ 漢 楚ニ後アリ ⑤ 六朝 ⑥ 唐 南方未タ開セス 中 間 ⑧ 宋 北辺 ⑨ 遼 金 北辺 ⑩ 元 ⑪ 明 ⑫ 清 北辺</p>	<p>• 言 語 (一) 古来雜種</p>	<p>• それから尚ほ外の差は言語の上であります。……</p>	<p>• 政治の変に於ても、此二分子の動搖を窺ふべし。① 三代の治は河辺に在り。② 春秋戦國に至りても、諸侯に覇たる者は皆河辺に在り。③ 秦天下を統一して、呉尚未だ亡びず。……亦江辺の秦制を承くること少きを見るに足らん。④ 劉項の天下を争ふや、江の始めて河を窺ふものなり。然れども、大勢は猶河辺の戦に依りて定まる。……南陽草廬に三分を画してより、呉蜀は大勢を南下し、⑤ 六朝の風雲は江河を一鼎に和味するの機会を与へたり。……⑥ 唐代に至つて國家の体面一変し、文物法象此に至りて近代と古風を分つ所以のもの</p>
<p>• Difference of climate and soil</p>	<p>• 地勢風土の工合がそれ程違つて居りますから生活の風が又従つて違はなければならぬ。……</p>	<p>• 言 語 (一) 古来雜種</p>	<p>• それから尚ほ外の差は言語の上であります。……</p>	<p>• 政治の変に於ても、此二分子の動搖を窺ふべし。① 三代の治は河辺に在り。② 春秋戦國に至りても、諸侯に覇たる者は皆河辺に在り。③ 秦天下を統一して、呉尚未だ亡びず。……亦江辺の秦制を承くること少きを見るに足らん。④ 劉項の天下を争ふや、江の始めて河を窺ふものなり。然れども、大勢は猶河辺の戦に依りて定まる。……南陽草廬に三分を画してより、呉蜀は大勢を南下し、⑤ 六朝の風雲は江河を一鼎に和味するの機会を与へたり。……⑥ 唐代に至つて國家の体面一変し、文物法象此に至りて近代と古風を分つ所以のもの</p>
<p>• Difference of climate and soil</p>	<p>• 地勢風土の工合がそれ程違つて居りますから生活の風が又従つて違はなければならぬ。……</p>	<p>• 言 語 (一) 古来雜種</p>	<p>• それから尚ほ外の差は言語の上であります。……</p>	<p>• 政治の変に於ても、此二分子の動搖を窺ふべし。① 三代の治は河辺に在り。② 春秋戦國に至りても、諸侯に覇たる者は皆河辺に在り。③ 秦天下を統一して、呉尚未だ亡びず。……亦江辺の秦制を承くること少きを見るに足らん。④ 劉項の天下を争ふや、江の始めて河を窺ふものなり。然れども、大勢は猶河辺の戦に依りて定まる。……南陽草廬に三分を画してより、呉蜀は大勢を南下し、⑤ 六朝の風雲は江河を一鼎に和味するの機会を与へたり。……⑥ 唐代に至つて國家の体面一変し、文物法象此に至りて近代と古風を分つ所以のもの</p>

八 美 術	七 政
<p>• difference of art? Architectural style south wood curved? north brick [] ? middle slating ?</p>	<p>ノ後統一難し 模倣ノミニテ 新氣力ヲ発セスして止ム ⑫ 清ハ明ノ制ヲ改メス • China is great when the 2 combines As 唐宋 etc. when [] the thought becomes one? Or when one reaches climax ?</p>
<p>• 美術ノ如キモ此点アリ 見レハ (一)河 漢マテ (二)江 宋 (三)中間 唐 同時に於テモ地方の差 アリ</p>	
<p>• 従つて此國の文化なり美術なりの 現象が一定する能はざるのが当然 だらうと思ひます。 • ……支那の美術の上に於ても三通 りの差別があるやうであります。 • 時代のみならず地方の差別と云ふ ことを美術品を見る上に於て観念 しなければならぬ。</p>	<p>子江と黄河の水を交せる機会を生 じて、⑥唐の文明の燦然華を開い た所は即ち此二つの分子が能く混 化した時でありませう。……其後 ⑦五代になつては勢を引付けて揚 子江の辺に至らしめ、⑧宋になれ ば河の方の分子がなくなつて支那 の中心は転じて揚子江に在りまし た。丁度漢だとか周だとか黄河代 表者であるが如く、宋は揚子江の 代表者であつて支那の代表者では ない。それからして⑨遼だの金だ のがあり、又⑩元などが起つて勢 が北の方に移つた。政事上の勢は 北の方に止まつて仕舞て居りま す。元の後まで⑪明が南の方に一 時移つたけれども矢張永楽帝が北 京に拠り、⑫滿清も出て来て此に 拠つたから矢張り一方に偏して居り ます。政事上では唐の時を除くの 外支那と云ふものを代表したもの はなからう。</p>
<p>• 文化の現象に至つても、江河其趣 を異にす。 • 要するに、支那の文化美術を大別 すれば三つあり。曰く周末、既ち 河民の精なり。曰く宋朝、江民の 粹なり。曰く唐代、江河合体の華 なり。此他は前後聯繫のみ。三代 は春秋列國を生み、六朝は唐を生 み、五代は宋を産む。其間、包蔵 するの氣力は貴重すべし。漢は周 末を食つて肥え、明は唐宋を消化 するのみ。進軍の上にて於て価値少 し。元清の如きは、実に其余影に 過ぎざるなり。</p>	<p>は、河中に江水を投じたるに依ら ざるなからんや。……而して当時 大勢猶河辺に在り。……⑦五代の 変亂は重ねて江河を湧かしたれど も、其結果は中心を一層南下せし めたり。⑧趙宋の汴に都し、尋いで 南渡したるが如きは、政治以外 に河民を置きたるのみ。蓋し宋は、 周漢が河に於ける如く、江の精神 を發揮せるものなり。中央集権の 制の如きは、著しき變化なるべし。 ⑨藩鎮力弱く、遼金を跋扈せしめ 、竟に胡馬を蹂躪せらるゝに及んで は、江河共に影無し。⑩元代は… 支那人種をして南北共に萎靡せし めたり。⑪明朝は唯復古に汲々とし て、未だ本来の面目を發揮する に至らず。……元代政府人民の隔 絶は、依然として尚ほ在り。國家 的の觀念極めて薄く、其末路は、 宋末に比して実に憐むべきものあ り。</p>

* 「旅行日誌」、 「支那旅行講演メモ」、 「支那美術に就テ」は平凡社版全集第五卷、「支那の美術」は同第三卷所収。
傍線・数字は筆者による。とくに数字は対照の便宜のために付けた。Iの漢文メモは日誌第一分冊、II一、七は一〇月三十一日の記事。